0_□□□□□□□□□



プロローグ　　.txt

フリード翁が病にかかった。
彼はベッドから起き上がることもできず、食が細っていきみるみるうちに弱っていった。

グレーテは彼を救うため少し離れたマイヨの森の奥まで出向き、薬湯を作りフリードを看病したが　　…
彼は日に日にやつれていき、スープ以外がのどを通らなくなっていった。

・・・

「じいちゃん　　…！お願いしなないで　　…！」
彼の手を取り泣きながら懇願するグレーテ。
「おれは　　…もうだめだろう。すまん」
力なく答えるフリード。
「いや　　…！いや　　…！お願い　　…なんでもするから！わたしじいちゃんのためになんでもするから！」
必死に彼に縋りつく彼女の背後に、気づくと最近村を訪ねてきた黒いローブの男が立っていた。

・・・

「ふむ　　……これは黄熱病ですね」

男はつぶやくようにいった。枕元の水差しを持ち上げ、濁りを確かめ、またゆっくり置く。

「黄熱病。低地ブランデン地方の風土病でしてね。蚊が媒介する。正確には　　――
白い縞模様の入った、あの小さな蚊ですよ。あれが感染者の血を吸い、次の人間を刺す。それだけで伝染る
。実に厄介だ。病そのものは目に見えないほど微小な毒素　　……
私の師はこれを瘴気と呼んでいましたが、まあ呼び名はどうでもいい。問題は経過です」

男は指を一本立てた。

「まず第一期。感染からおよそ三日から六日の潜伏を経て、突然の高熱。頭が割れるような痛み、背中と四
肢の筋肉痛、嘔気。この段階では普通の熱病と区別がつかない。見落とす医者が大半です。私でなければ、
まず見落とす」

声には何か面白いものを語るような響きさえあった。

「そして肝臓がやられる。だから目と肌が黄色くなる。黄疸です。腎臓も同時に壊れていく。尿が減り、や
がて止まる。そして最も恐ろしいのが出血だ。歯茎から、鼻から、目の粘膜から。胃壁の毛細血管が破れて
、患者は黒い血を吐く。吐黒血　　――
フィエブル・ネグロ、南方の医者はそう呼ぶ。黒い血の熱、とね。胃の中で血が酸と混ざって黒く変色する
んです。タールの滓のような、あるいはどぶの泥のような。なんとも言えない臭いがする。この段階まで来
ると死亡率は跳ね上がる。　　……まあ正直に言って、半数は死にます」

・・・

男は懐から薬瓶を取り出し、光に透かした。

「治療法は、ない。正確に言えば、資産家や冒険者ならば可能でしょう。熱を下げ、水を飲ませ、吐いたら補い、痙攣が来たら押さえ、出血には止血を試み、――
要するに、この人の体がみずから毒素を打ち倒すまでの時間を、稼ぐ。人の体というのは存外しぶとくてね。……」
男はなぜか窓の外へ向き直る。
「マンドレイクの根があればよいでしょう。あれの含む魔力と成分から抽出できる薬で私ならば治療できる。ただこれは普通のマンドレイクではだめです。魔領の近くの森からしかとれない強い作用のある種類でなければならない。君がとってくることも、私がとってくることもできない。もちろん、この村の男衆でもね」

グレーテは男の話を熱心に聞いていた。半分以上は意味が分からなかったが、最後の部分は理解できた。
「そのマンドレイクの名前を教えてください。わたしきっと手に入れます」
男はわずかに愉快気に首をかしげて、答えた
「ラファヌス・テスティクラリス。詳しいものがいれば名を聞けばすぐに理解できるでしょう。私はしばらくこの村に滞在します。もし万が一手に入ることがあれば、村長の家をたずねなさい」

そういうと彼は去っていった。グレーテは必死にメモをすると、街へ向かって飛び出したのだった…

紫の森のマンドラゴラ.txt

「ああ…「」さん。え? 残業ではないですよ。」
「どしたん? ってヤリモクみたいな言い方ですね…
最近ギルドに来た女の子が依頼を出してるんです。魔領近郊の森に住むマンドラゴラの採集…
普通のじゃなくて、とっても珍しくて…そして危険な場所にしか生えないもので」
「腕に覚えのある人でないといけないんです。でも、用意されたお礼金が銀貨４枚で。…
家族が病気で、治療に必要だとかで。でもこんな額じゃ誰も命駆けで取りに行く人なんていないですから。」

「一応貼っておきますね。依頼書。無理はしないでくださいね」

紫の森に生える特殊なマンドラゴラの収集。
注意。高危険度地域。

報酬　４銀貨

ルール:
魔領へのポータルがなぜかギルドの地下の倉庫の一角にできており、そこへ入ることで紫の森へとゆくことができる。
紫の森は危険な魔物が跋扈しており、これらを排除できなければ収集は難しいだろう。

有志のパーティーが募られているようだが、今のところ誰も参加する様子はない。
もし参加するならば、容易にすむ旅路ではないことを覚悟しなければならないようだ…

参加する場合、下記の情報を提示してください。
各キャラクターはHPを１００、ステータス点を２０もちます。

□□□

□□□

□□□　1200

//

□□

□□□

～その後～

少女グレーテの家の扉の前に羽音がする。

ギルドからの伝書鳩には、依頼の品である特殊マンドラゴラの根が入っていた!

さっそくあの男へ渡すと、男はあっさりと治療薬をこしらえてみせた。

フリード翁へ飲ませるとその日のうちに彼の症状は消え　　…起き上がることができるほどに回復したのだ!

「おじいちゃん! よかった　　…っ! 」

「すまなかったなぁ　　…グレーテ」

かくして冒険者たちのほとんど無償の活躍により小さな農村の小さな幸せが守られたのだ。

これで街のギルドの評判と冒険者たちの評判がまた少し上がることだろう　　…!

HAPPY END

//

～? ～

男は仕事を終えたからなのか、静かに村を去っていく。向かった先は近くの街　　…

□□□□□ #1
□□ : 2026-08-04 11:18:30 UTC (Admin)
□□ : 2026-08-04 11:20:06 UTC (Admin)